

神武寺と六代御前について (その II)

神武寺 第七十六世住職 土屋慈恭

田越川の上流・神武寺のふもと沼間(沼浜)は、かつて文字通りの沼地で近くまで海岸線がせまっていた。

この講演が、平曲の栄枯盛衰の語りとともに、皆様の地域の歴史に思いを馳せる一助になれば幸いです。

1. 六代御前 祭礼 ← かつては芝居がかかり三浦半島有数のお祭りであった!

毎年 7 月 26 日開催 桜山氏子会 主催
法要 別當 神武寺 於：六代山 不動院

『逗子と六代御前』
P14~15 参照

本尊は不動明王 文覚法師 妙覚法師 (=六代御前の) 位牌を祀る 三浦不動尊霊場第 26 番札所
「六代御前の墓伝説地」として逗子市文化財指定

2. 神武寺と六代御前

時代背景〈略年表〉

神亀元年(724) 聖武天皇の霊夢により行基が関東に下向、神武寺を開く
天安元年(857) 慈覚大師円仁 神武寺を再興、法相宗を天台宗へ改宗

.....
平治 2 年(1160) 源義朝 平治の乱で敗走途中 尾張国で謀殺される ・このころ文覚出家
治承 4 年(1180) 文覚 伊豆にて頼朝に挙兵をすすめる ・以仁王の令旨 ・鎌倉大倉御所 建設
寿永元年(1182) 源頼朝の命により文覚が江ノ島岩屋に弁財天を勧請し、藤原秀衡調伏を祈る『吾妻鏡』
寿永 2 年(1183) 『相模国三浦郡医王山神武寺御縁起』神武寺五八世亭尊 著 文禄三年(1594) より

寿永二年(1183)癸卯(みずのとう)將軍頼朝公御參詣ありて、平家追討の其のために御建立して殊更に拾二寺院を営(ととの)え、常法華三味の道場と成て、高尾の文学聖人(文覚上人)を住職と定らる、行基より三十八代に当る

文治元年(1185) 3 月 平家、壇ノ浦で滅亡 ⇒ 文覚 六代の助命に奔走 / 鎌倉幕府成立
建久 3 年(1192) 政子の安産加持のため神馬を奉じ誦経を修める(二十七社寺中)『吾妻鏡』
建久 9 年(1198) 六代御前(平高濂) 田越川にて処刑 (1205 年説もあり 『縁起』未記載)
正治元年(1199) 文覚流罪
建仁 2 年(1202) 故大僕卿(義朝) 沼濱の御旧宅を鎌倉に壊し渡し、榮西律師の亀谷寺(現 寿福寺)に寄付せらる。『吾妻鏡』
建仁 3 年(1203) 文覚 鎮西にて示寂(六五歳)
承元 3 年(1209) 源実朝参詣 「神嵩并岩殿観音堂」 『吾妻鏡』
正応 3 年(1290) 鶴岡八幡宮楽人中原光氏 没 神武寺『石造弥勤菩薩坐像光背刻銘』
永正 4 年(1507) 大火により伽藍・寺宝・記録類を悉く焼失

3. 沼浜郷(沼間)と源義朝

沼浜郷

・奈良 東大寺正倉院所蔵、天平勝宝元年(749 年)の『調布墨書』には「相模国鎌倉郡沼浜郷」と記す。
・平安時代の『和名類聚抄』などには、鎌倉郡の七郷として「沼浜郷」「鎌倉郷」「埼立(はしたて)郷」「荏草(えがや)郷」「梶原(かじわら)郷」「尺度(さかど)郷」「大島郷」が記されている。

みなものよしとも
源 義 朝

“頼朝・義経の父” “平清盛のライバル”

平安時代末期の武将。為義の長子。相模に住んで東国に勢力をもった。仁平 3 (1153) 年下野守。保元 1 (56) 年の保元の乱には平清盛とともに後白河天皇の陣営に加わって白河殿を陥れ、崇徳上皇方についた父をはじめ源氏の一族を斬った。功によって昇殿を許され、左馬権頭に任じられたが、権臣藤原通憲 (信西) と結んだ清盛の勢威に及ばないのを不満として、通憲と不和の藤原信頼と結んで平治 1 (59) 年平治の乱を起した。しかし敗れて東国に逃れる途中立寄った尾張野間の長田忠致のもとで、浴室で謀殺された。(ブリタニカ国際大百科事典)



『平治物語絵巻』に描かれた平治の乱で敗走する義朝一行

- ※沼浜邸 (沼浜亭・沼浜城) は、法勝寺の付近であるといわれる
- ※光照寺は、頼朝の異母兄、鎌倉悪源太義平の菩提寺であるといわれる
- ※五霊神社は、沼浜邸の鎮守として勧請したものであると伝えられる

4. 文覚上人と神武寺



平安時代末期～鎌倉時代初頭の真言宗僧侶。もと北面の武士で遠藤盛遠と称した。誤って源渡 (わたる) の妻、袈裟御前を殺し、これを悔いて出家し、諸国の霊場で苦行した。のちに高雄神護寺の復興を発願し、後白河法皇の御所を騒がし、伊豆に流された。源頼朝の拳兵に協力し、一時大いに権勢をふるった。頼朝の没後、謀反を企て失敗し、佐渡に流され、いったん許されたが再び鎮西に流され、失意のうちに没したという。(ブリタニカ国際大百科事典)

■『平家物語』では、激しい気性と不屈の闘志、強烈な行動力を持つ《荒法師》として登場する

- ・「飛ぶ鳥も祈り落とすやいばの験者」 ← 修験の行者
- ・高尾山神護寺の再興を志し、後白河法皇に強要して伊豆に流される
- ・流された伊豆で頼朝と会い、父義朝の髑髏をみせて、平家討伐をすすめる。
- ・伊豆と京都を八日で往復し、後白河法皇からの平家追討の院宣を頼朝へ届ける
- ・平家の嫡流六代の助命に奔走する

■『相模国三浦郡医王山神武寺御縁起』には、三十八代住職とするが、『神武寺住持世代書上』には記録なし。

文覚上人と蕨

侯爵 小村 欣一 ※1

……文覚は相州三浦郡の神武寺といふ山寺の住職をしてみた時の話である。神武寺は今も逗子の名勝地になってある。この山寺には、いつも春先には澤山の蕨が芽生えるのであるが、これは文覚が、この寺の住職の頃、納所たちがいつも春先の食膳に蕨の料理を出すので、「これは何處から持って来た」と聞いた。「この山にいくらも芽生えて居ります」と答えると、「生ひ立つ若芽をとるのは無慙な行ひである、生ひのびるままにさせよ」と弟子達を叱ったと言ふことである。その為か、いつも神武寺の山裾には蕨が澤山に出来る。逗子に住んでゐた徳富蘆花は、小説「不如帰」の中に伊香保の山の蕨狩りのことを書いてあるが、伊香保まで行かずとも、この神武寺まで来れば、佳い蕨狩りが出来るのである。文覚が六代御前の為に東西遠路を早馬で駆馳したのも、六代御前が平家の嫡流であるし高貴な身分であるからといふ理由からよりも、これから生ひ立つ若芽の如きいたいけなものを殺すに忍びなかつたのであると見るべきであらうと思う

小村 欣一 (コムラ キンイチ) 1883-1930 大正-昭和時代前期の官僚。

小村寿太郎の長男。外交官となり、清(しん)(中国)、イギリスに勤務。のち外務省参事官、同情報部長などをへて、昭和 4 年拓務省事務次官。侯爵。貴族院議員。演劇通で知られ、文化人に知己が多かった。

※芥川龍之介「袈裟と盛遠」 菊池寛「袈裟の良人」は文覚 (遠藤盛遠) をテーマにした小説